

けたものではなからうか、遼が滅亡してから陶氏の時代に至るまで二百年許りを經てゐる。僅に燕北録中から五字の契丹字を拾ひ上げ得るに止つた程に、當時契丹字の資料が少かつたとすれば、別に存した楷體の契丹字が陶氏の眼に觸れず、遂に此等の五字の體から推して、如上の説明を遼史の記事の上に附加することに成つたものかも知れないと考へるのも、必ずしも不稽の甚しいものではあるまい。兎も角契丹にかく隸楷兩體の文字があつたこと疑無しとすれば、何等か之に對應する記事を遼代の書史について求めて見なければならぬ。

契丹には大小二字の存したことは周知の事實であつて、太祖の作つたのが大字であるが、小字の製作は太祖の皇子迭刺に歸せられてゐる。遼史卷六十四皇子表迭刺の項に、「性敏給、太祖曰、迭刺之智、卒然圖功、吾所不及、緩以謀事、不如我、回鶻使至、無能通其語者、太祖曰、迭刺聰敏、可使遣逐之、相從二旬、能習其言語書、因制契丹小字數少而該貫」と見える、白鳥博士は、大字製作後の太祖の時代に回鶻の來貢した年、即ち天贊三年及び四年の何れかに、此の事件を繋げるべきだと見られた^⑭。さて小字の製作は、此の如く迭刺が回鶻の言語や書を習ひ、之によつて工夫せられたもので、其の字數は少いが、然も該貫すと記されて居ることから考へると、回鶻字を模倣した音字であつたらうと考へるのは無理ではない、實に Bushell 氏は早く一八九七年にかゝる考をのべ、一九一二年には Marguart 氏も此の記事を據として『契丹字(小字をいふ)が「漢字を型として作られたものとは無論考へることは出來ない。數の少きことは益々西方の字に倣つたものなることを示す。而して此の文字の製せられた事情から考へれば、迭刺が契丹文字を定めるに當つて、回鶻文字に準據したものであることは些少の疑をも挾むべきでな